

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 10 日現在

機関番号：33943

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2013

課題番号：23652150

研究課題名(和文)日本人英語における「イノベーション」を国際発信力につなぐ国際英語教育

研究課題名(英文)Pedagogical Effects of Accepting 'Innovations' in Japanese English

研究代表者

小宮 富子 (KOMIYA, TOMIKO)

岡崎女子大学・子ども教育学部・教授

研究者番号：40205513

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円、(間接経費) 450,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は1) EC英語である日本人英語にもerrorと区別されるinnovationが存在することを確認し、2)日本人英語の特徴を示すこと、3) innovationの受容が日本人のコミュニケーション能力の向上に有効性を持つことを確認することであった。学習者コーパスICNALEを用いたアジアと日本の学習者英語における高頻度語連鎖の相違に関する調査により、日本人の英語使用に日本文化の独自性が反映している可能性が判明した。また、日本人英語使用者の上位群と中位・下位群で日本人英語のinnovationの受容の意義についての意識に相違が見られることが判明した。

研究成果の概要(英文)：The aims of the present study are 1) to identify 'innovative uses of English' in Japanese English (as an Expanding-Circle variety), 2) to analyze them from linguistic and cultural points of view, and 3) to see if positive attitudes toward 'innovations' in Japanese English help Japanese learners to improve their English communication skills. We statistically analyzed word clusters used in essays by Asian learners and found that Japanese learners of English have tendencies to overuse some 'modality-related expressions' such as 'I think that' or 'may be.' We have also noticed attitudinal difference toward innovations in Japanese English between higher level Japanese users of English and middle or lower level learners of English.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・英語教育一般

キーワード：日本人英語 Innovation 国際英語論 国際発信力 コーパス

### 1. 研究開始当初の背景

国際英語論は母語話者英語中心主義を排し、国際伝達における英語変種間の平等性を指摘した点に意義がある。しかし、その主たる関心は Outer Circle (OC) 英語の identities の尊重に向けられ、Expanding Circle (EC) 英語の独自性の受容については消極的である。OC 英語における母語話者英語との相違は innovation とみなされ独自性が認知されているが、EC 英語には error はあっても innovation はないとされることが多い。

英語の国際的普及は必然的に英語の変容をもたらす (Honma, 2008, 7) (吉川, 2010) もであり、OC 諸国における英語の慣用化された創造的使用を Kachru (1997, 228) は肯定的に innovation (独自の用法) と呼び、deviation と区別した。Van Rooy は OC 英語における error (deviation に相当) と innovation の区別は、読解実験での視線の停止時間の測定を通して心理学的に裏付けするという発表を IAWWE2010 大会において行っている。しかし、これまでの国際英語論研究では日本人英語のような EC 英語には innovation は生じないとする考えが中心的であった。それに対し、Hino (2008a, b) などは EC 英語の独自性の尊重を強く訴えている。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は 1) EC 英語である日本人英語にも error と区別される innovation が存在することを示すこと 2) 英語使用における innovation の兆候を分析し未来の日本人英語の文法特徴を予測すること 3) 日徴に関する予測を立て、innovation の積極的な受容が「日本人英語」への自信を高めて日本人の国際コミュニケーション能力の向上に有効性を持つことの確認をめざすものである。小宮 (2007, 2010) では学習不全による error とは区別される innovation が日本人英語にも存在することを冠詞使用の分析などを通して示す試みを行ったが、本研究では研究領域を冠詞以外にも広げ、日本人英語の高頻度語連鎖やモダリティ表現における innovation の生起を日本語や日本文化の特性と対照しつつ同定するとともに、日本人英語の innovation の積極的な受容が「日本人英語」への自信を高めて英語学習者の国際コミュニケーション能力の向上に有効性を持ちうるという仮説の確認を目指した。

### 3. 研究の方法

本研究では、平成 23 年から 25 年までの 3 年間に次の (1) ~ (3) の研究を並行的に実施した。

(1) 国際英語論や日本人の英語に関する先行研究の分析

国際英語論における Expanding Circle の

英語の位置づけに関する先行研究 (B. Kachru 1982, 1997, L. Smith 1976, 1983, J. Jenkins 2006, 2007, Honma 2008, Hino 2008a, 2008b, 吉川 2010 他) や第二言語習得での文化転移や中間言語に関する先行研究 (R. Schmidt 1983, Selinker 1972 他) また日本人の英語に関する先行研究 (投野 2007, 和泉 2005, 井出 2006, 安武 2009 他) などの分析を行った。

(2) 日本人の英語使用における innovation の具体例の同定

日本人英語における error と innovation の区別を定義し、日本語の文化転移による innovation やその前兆的用法の同定をめざし、個々の innovation の生起に関連すると思われる言語的・文化的要因を分析した。また、アジア 10 カ国の英語学習者のエッセイを収録した学習者コーパス ICNALE を用いてアジアと日本の学習者英語における高頻度語連鎖の相違を調査し、国や地域による使用傾向の違い、習熟度による使用傾向の違い、思考動詞を含む語連鎖の使用傾向の違いを比較し、日本人英語の特徴の抽出を試みた。

(3) 日本人英語の独自性の認識が日本人の国際発信力に与える教育効果に関する調査予備調査として、シンガポールで英語を学ぶベトナム・中国・ミャンマー・タイ・フィリピン・インドネシア計 59 名の成人英語学習者を対象に非母語話者英語に対する意識調査を実施した。また、日本人英語学習者・使用者 (上位群・中位群・下位群) を対象に、「日本人の英語」を肯定的に受容する姿勢が自身の国際コミュニケーション力に与える効果に関する意識調査を行った。

### 4. 研究成果

本研究では、(1) 日本人英語の innovation の同定に於いて研究成果を挙げることができた。また (2) 日本人英語の innovation の認識が国際発信力の向上に役立ちうるという仮説の確認に関しては、英語習熟段階と学習段階で日本人英語使用者の意識に相違があることが見られた。

(1) 日本人英語の innovation の同定

日本語と英語の相違

日英語の言語距離を生み出す言語文化的要因として、英語の主語優位性に対し、日本語が主題優位言語であること、英語が SVO 構文を中心とする「原因 結果関係」を軸に世界を説明しようとする言語であるのに対し、日本語は「ウチ ソト関係」「世間 世界関係」を軸に話者と聞き手の共通感覚に訴えながら「話者の共感を合図する」言語であること、英語が命題重視の言語で「事柄の伝達」を重視するのに対し、日本語がモダリティ重視で「共感の伝達」を重視する言語であるこ

と等を確認しえた。また、日本語の「曖昧さ」を解く鍵として「場」の概念がもつ重要性を確認することができた。

日本人英語における innovation の生起

小宮 (2007, 2014) では、日本人英語の 4 段階を下記の表を用いて分類し、1・2 を学習段階、3・4 を習熟段階とみなし、習熟段階に見られる日本人英語の特性は innovation として訂正は不要であることを示した。

International Intelligibility	Difference from models	correction	Norm-dependency
1. barely intelligible	global error	necessary	Norm -dependent
2. often intelligible	local error	necessary	Norm dependent
3. intelligible	innovation	unnecessary	Norm -developing
4. Intelligible & effective	innovation	unnecessary	Norm -developing

また、日本人英語の innovation とみなしうる言語使用特徴として、発音における l と r や、b と v の混同、文法・語法におけるモダリティ表現の多用、文・談話構造における主題化の多用、談話における論理の曖昧さ、yes/no のゆらぎ、などが挙げられることを示した。(小宮 2014)

同時に本研究では、アジア 10 カ国の英語学習者のエッセイを収録した学習者コーパス ICNALE を用いてアジアと日本の学習者英語における高頻度語連鎖の相違に関する調査を行い(石川 2013)、日本人英語学習者は語連鎖の使用において他のアジアの EFL 学習者や ESL 学習者とは異なる、独自の使用傾向を持つ可能性が判明した。日本人学習者が多用傾向を持つ語連鎖としては、I think that / I agree with などがあり、may be などと共にモダリティ表現の多様が習熟度段階においてもより顕著に見られることが判明した。思考動詞を含む語連鎖使用では、習熟度による使用特徴よりも、国・地域別の使用特徴がみられ、日本人の英語使用に日本文化の独自性が反映している可能性がコーパス分析からも裏付けられた。

(2) 日本人英語の innovation への認識が英語学習に与える効果について

非母語話者英語に対するアジア人英語学

習者の意識に関する調査結果

シンガポールで英語を学ぶアジア諸国の EFL 学習者が英語変種の等価性や非母語話者英語・非母語話者教師について、どのような認識をもっているかに関する意識調査を実施した結果、「EFL 学習者にとって米語やイギリス英語が最も優れた学習モデルである」とする意見が 96.6%、「アジア人の英語教師より、英語母語話者教師の方が好ましい」とする意見が 86.4%であり、英米変種モデル優越観の根強さが窺われた。少数意見だが英語母語話者教師より非母語話者のアジア人英語教師の方が望ましいという回答も存在し、「文化が共通している」「アジア人の考え方や感性を理解してもらえ」「英米人教師より文法指導力に優れている」などがその理由として挙げられた。アジア圏での英語研修に親近感を覚えるアジア人研修生が多い一方で、シンガポールの英語変種については否定的意見も散見された。79.7%の回答者が「英米変種以外の英語変種に触れることは学習者にとって望ましい」としており、英語と英米文化を切り離して考えるべきだとする姿勢が見られる一方で、英語を学ぶには英米変種モデルや英米人教師が望ましいといういわゆる「標準英語志向」も根強く、アジア人の非母語話者英語への認識には「両義的」姿勢が見られた。(吉川・塩澤・倉橋・小宮・下内 2012) また、このような両義的態度が日本人学習者にも共通して見られることが後続の調査において判明した。

日本人英語の独自性の認識が国際発信力に与える教育効果について

非母語話者英語に接した場合に日本人学習者が非母語話者英語や日本人英語に対してどのような意識を持つか、国際英語論の指導の有効性についての調査を行った。習熟段階にあると思われる英語教員(上位群)と学習段階にある中位群・下位群の大学生において、非母語話者英語に対する認識に相違があり、上位群の英語使用者が日本人英語の innovation を肯定的に受け止める傾向をもつのに対し、中位・下位群にはやや否定的傾向が見られた。一方で、下位群は英語母語話者教師より日本人英語教師を望む傾向が見られ、学習者の心理的要因が関係している可能性が感じられた(2014年3月ESBB国際学会にて小宮が発表)。国際英語論的視点からの日本人英語への肯定的意識と英語力の相関性については、今後も研究を継続する予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計7件)

石川有香 'A Corpus-based Research on Thanks in British Dialogue, ICLLL2011, 査読有、26 巻、2011、pp384-389

小宮富子・本名信行・井出祥子・吉川寛、  
「英語教育と社会言語学 日本人が英語を学ぶということ」、Proceedings of the JACET 51<sup>st</sup> International Convention、査読有、2 巻、2012、pp28-35

石川有香、「語連鎖分析による学習者グループ特性の探索 学習者の習熟度と言語的文化的要因の交差」『統計数理研究所共同研究リポート 297』統計数理研究所、査読有、2013、pp 31-55

小宮富子、吉川寛、塩澤正、倉橋洋子、下内充「英語多変種との接触が学習者の英語観に与える影響：Outer Circle 英語に焦点を当てて」、JACET 中部支部紀要、査読有、第 10 号、2012、pp55-80

石川有香、「Recurrent Word Clusters Used by Asian Learners —A Statistical Study of Differences—」*Learner Corpus Studies in Asia and the World*、査読有、1 巻、2013、pp.67-76

石川有香「名工大英単語コンテストの開発と実施 工大生の連携を求めて」名古屋工業大学紀要『工学英語教育研究』、1 巻、2013、pp.49-58

石川有香、「共通英語科目のカリキュラム設計と科目運営の課題 特別クラスと課外クラスの設定」名古屋工業大学紀要『工学英語教育研究』、2 巻、2014、pp. 15-19

[学会発表](計 8 件)

小宮富子・鈴木達也・門田修平・三宅なほみ「大学英語教育における理論と実践の連携」、大学英語教育学会第 28 回中部支部大会シンポジウム、2011 年 6 月 4 日、名城大学

石川有香、「Stereotypes of English Speaking Style」、The 9<sup>th</sup> Asia TEFL International Conference, 2011 年 7 月 27 日、Hotel Souel KyoYuk Mun Hwa Hoekwan

小宮富子・石川有香・岡戸浩子・吉川寛・河原俊昭・榎木園鉄也・徳地慎二、「Research Activities of SIG on Linguistic Assessment」、大学英語教育学会第 50 回記念国際大会、2011 年 9 月 1 日、西南学院大学

小宮富子・吉川寛・倉橋洋子・塩澤正・下内充・榎木園鉄也、「Research Activities of SIG on World Englishes and Cross-Cultural Understanding」、大学英語教育学会第 50 回記念国際大会、2011 年 9 月 1 日、西南学院大学

小宮富子、「非母語話者英語への英語学習者の認識と日本人英語について」大学英語教育学会中部支部定例研究会、2012 年 2 月 18 日、中京大学

小宮富子、「英語教育と社会言語学」、大学英語教育学会第 51 回国際大会シンポジウム、2012 年 9 月 1 日、愛知県立大学

小宮富子、石川有香、「多文化共生社会におけるコミュニケーション力を高める大学英語教育」、大学英語教育学会第 52 回全国大会、2013 年 8 月 31 日、京都大学

小宮富子、「Japanese English from an EIL perspective」、The 1<sup>st</sup> International Conference of English Scholars Beyond Borders, 2014 年 3 月 22 日、Dokuz Eylul University (in Turkey)

[図書](計 2 件)

石川有香、「Bridging the Gap between general English and Academic English」 in G.R.S. Weir, S Ishikawa,& K.Poopon (eds.) *Corpora and Language Technologies in Teaching, Learning and Research*, University of Strathclyde Publishing, 2011, 151(pp.87-94)

小宮富子、「日本語と日本人の英語」塩澤正、榎木園鉄也・倉橋洋子・小宮富子・下内充 編著『現代社会と英語 英語の多様性を見つめて』2014 年、金星堂、397 (pp58-68)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小宮富子 (KOMIYA, Tomiko)  
岡崎女子大学・子ども教育学部・教授  
研究者番号：40205513

(2) 研究分担者

石川有香 (ISHIKAWA, Yuka)  
名古屋工業大学・工学(系)研究科(研究院)・教授  
研究者番号：40341226